

やっとわかった、行きつく所は漱石

高山宏

一九六八年大学入学世代から後続の好学諸兄妹に御挨拶の好機を頂けたのは幸甚の限りである。全共闘学生の名を歴史に残した一、二年という事で、入学と同時に講義停止、学園封鎖、最後は機動隊導入というタイミングの一学生だったので、ゆっくり勉強という環境とはとてもいかなかったが、自分で勉強という契機を掴んだ人間には却って良かったのかもしれない。のっけに僅かでも刺激的な教師の授業を受けられたら、そこを出発にして、差し当たり単位などの顧慮一切なく、中高の教育とは全然違う種類の勉強に集中する厩大な自由時間に恵まれたからだ。不幸に名を借りた至福の時。

僕は教養課程の英語で若き美男助教授由良君美に出遭った。慶應、学習院でドイツ観念論哲学を学び、東大教養学部英語科の高橋康也に招かれた異色のキャリアを持つ由良氏は早速ドイツ人哲学者エルンスト・ブロッホの『希望の原理』の英訳本等、トンデモ教科書を材に「英語」語学授業を始めた。授業と余り関係ない「参考」書として色々面白い本を紹介してくれるのだが、その一冊がグスタフ・ルネ・ホッケの『迷宮としての世界 マニエリスム美術』（一九五七）だった。邦訳した独文学者種村季弘の訳も見事だ、専門の独文の方の種村本も皆面白い、片端から読めと由良は言った。『迷宮としての世界』は暇にまかせて冒頭の十分の一ほどは種村訳をそっくり讀んだし、面白いドイツ語関連文献なるもの見たさに急ぎドイツ語も「独習」に努めたものだ。ホッケを世に出したエルンスト・グラッシ、ホッケの一番秀れた弟子筋なるジョン・ノイバウアーの『象徴主義と記号論理学』は後の僕企画のヨーロッパ学批評叢書に必ずや入れられる運命であったわけだ。兎角面白い、死ぬほど面白い。由良先生自身が日本英文学界（会）のロマン派研究を「もう少し面白いものに」したいと号して旧套アカデミーから失笑を買った『椿説泰西浪漫派文学談義』の著者である。エドガー・アラン・ポーをやるに仏語必習なのと同様、コールリッジ、ロレンス・スターンを学ぶに独語必修のこと、と予め言っておく。数年せぬ間に究極の汎ヨーロッパ文学論、アンドレアス・キルヒャー著『マテーシスとポエーシス』の邦訳出来の段取りで旧来のヨーロッパ文学比較研究界に地殻変動が生じるはずなのだが、それまで待てるか（その前に世界終熄？）

由良氏は自分を引いてくれた恩人として高橋康也氏の仕事も随分褒めた。就中『エクスタシーの系譜』（一九六六）。ジョン・ダンに発し、ロマン派に充実する英文学の一王道を、氏の真実親懇する神秘主義的カトリシズムと数学趣味（キャロル・ベケット）をつてにしっかり一本系譜化してみせた。この名作中の名作の参考文献をじっと熟読してみると、どうやらこれが中核的典拠だと感ぜられるのがロザリー・L・コリーの『パラドクシア・エピデミカ』。一九六六年の刊。ということはフーコーの『言葉と物』と同じ年。僕は流行し始めていたフランス・ポスト構造主義批評に無知無関心のように言われ続けたけれど、高山はコリーを熱愛しているんだから、コリーの英文のエレガンスを欠いたドゥルーズの『意味の論理』なんかに敢えて触れる必要はない、と弁護してくれたのは一年先輩の大の字の付く才人、富山太佳夫氏であった。由良は多分僕の何倍も富山氏の学業を買っていたと思う。さるアンケートで先輩は「自分には師はいない」等言っていたが、おいおいおまえ、何言ってるんだよ。高山、富山の両方を等しく愛したのが駒場の由良、本郷の大橋健三郎の両先生である。僕の型破りなビブリオフィリア自伝『ブック・カーニヴァル』には多くの先生方の高山オマージュが並び入っているが、きみきみたりて僕僕たらしめよという健三郎先生の一行、一番重く、有難かった。由良も大橋も考えてみれば東大閥外の人。学界の人間関係の微妙な絡みを考えることもあった。

あったが超越した。僕には奇才四方田彦氏が恩師由良君美のことで絶妙な資料の集め方並べ方をして一世を風靡した『先生とわたし』を書く気など、ない。

僕に与えられた役割は由良氏がもうひとつ僕に教えてくれ、いずれ二人して日本語版を出そうと約束し合うまでに共有したヒストリー・オヴ・アイディアズ事典の完訳の担当だった。難しい人品を警戒しながら目利きの博学編集者、平凡社の二宮隆洋と人選その他相談し続けながら終に『西洋思想大事典』全五巻として大々的に刊行した。沢山本を出させてもらったが、僕が人並に胸を張れるのは評論集『アリス狩り』（一九八一）が由良の『椿説』、高橋の『エクスタシー』と並べて愛読して欲しいと願えるの他にはこの巨大思想事典あるのみである。小観念が幾つか積み重なって中観念になり、それら中観念が組み合わせあって「確実性」だの「神話」だの大観念が形を成していく知識の下からの、上からのダイナミックな成り立ちが存分に味読できる。一番融合だの領域横断だのといった試みの典型たる「文理融合項目」はこの超領域の超出版物にも仲々困難のようだが、社会文化系分野融通には相当威力がある。一九六八年（またしても！）に出て七四年刊。由良はこの事典のお気に入り項目をコピーして、よく教場の学生たちに配っていた。修士修了して由良・高橋の居る駒場外国語科の二年助手になって了うと、コピー機のある助手室に由良氏がよく喋りにみえてこの事典の素晴らしいところを話し合った。それが同事典邦訳計画に発展していったわけである。一九七四年刊というところが大事だ。二十世紀末四半世紀の

いわゆる「現代思想」諸々は完璧スルーということだ。デリダとドゥルーズもかけらもない。神話だのメタファーだの、分断をつなぐことに忙殺された二十世紀前半の（またしてもドイツ系）モダニズム・アートの学的対応物が、その代わりテンコモリ。その時点での最大の学的発見物がホッケによれば酔乎たるマニエリスム（魔的シェイクスピア、その精神的双生児たるジョン・ダン）、ロマン派、そして魔的シェイクスピア及びダンを再評価した一九二〇年代モダニズムの動きを歴史的な循環の系譜であったことになる。英文学を西欧文化史全体の中に捉え直してみる時の一番大事そうな枠組を僕は由良君美とともに新しく普遍相で捉え直された「マニエリスム」の中に見出した。一九八一年から一九九〇年まで僕の英文学は自分なりに計画していた完成体に達していた。二十一世紀になってすぐヒストリー・オヴ・アイディアズ事典には、「新」を頭に冠した形でお目見えした。「コロニアリズム」だの「フェミニズム」だの、いかにもいう大項目が立項される一方で「神話」だの「メタファー」「ウット・ピクトゥーラ・ポエーシス」といった項目は消えた。あなたならどちら、とる？

「金、金、金！」という経済なんだか政治なんだか判然しない新世紀の世情とともに人文学も予想通り世界に対するパワーを喪失しつつある。典型はヒストリー・オヴ・アイディアズ事典の旧版に、十七世紀を以て前後二分されて例外的に二項立項された「サートウンティ（確実性）」観念の大スペースの消滅である。むしろどこを見ても「不透明」というキーワードしか目に入らない。この時代のエニグマ、世界大の謎を解き、ひょっとしたら先を展望させてくれるかもしれない大ヒントが実は英文学にあるのではないかという僕の見当を最後に紹介する。追い詰められたらOEDをめくろう。「サートウンティ」でも良いが、やっぱ「リアル」でしょう。初出年指示、一番濫用された時代の用例累積が有難いOED。「リアル」初出が一六〇一年、「ファクト」が一六三一年、「データ」が一六四七年・・・と、いつも授業を始める前に僕は黒板や白板に書き出す。そして一六四二年劇場封鎖、一六六〇年王立協会（六七年頃「普遍言語」運動、同時にウィリアム・ペティの「クレジット経済」・・・）、その直後に一七一九年『アドヴェンチャーズ・オヴ・ロビンソン・クルーソー』（デフォー）、その直後に有名な「南海泡沫事件」とE・チェンバース『サイクロペディア』。「アドヴェンチャー」が「冒険」なのか「投機」なのか一向判然しない、二十一世紀の今に酷似した時代の空気が透けてみえまいか。TACO等と蔑称されだしたどこかのタリフマン大統領の世界がこの先「不透明」なんかである筈があるか。秀才浅田彰がコン・マンたるジョン・ロウの一大バブル演出の分析から始めた先鋭なクレジット近代の分析を人文学に翻案してみれば即ち種村季弘『詐欺師の楽園』である。「普遍言語」の行きついた所は、国際公用語たるラテン語の廃止、ヴァナキュラーへの転換であった（この辺、日本で一番熟知するに至った夏目漱石のいわゆる言文一致への耽溺だって、二葉亭のロシア文学狂いとかと併せ考えてみれば何か出てくる）。そして電気が加わることで完全に0/1バイナリーの表記システムと化した電脳普遍言語に一番なじみ易いのがクレジット経済。まさしく〈今〉現在の我々の日々の状況であるまいか。その通底ないし循環を英文学ほど鋭く先取りしてみせたものなし。